

<原著>

大学生の保持するスポーツ指導者観の実態とその変容可能性  
—福祉系大学体育系学科3年生を対象として—

栗田 昇平・矢野 裕介・山本 浩二・中山 忠彦

Ideal image of sports coaches and the possibility of changes in it:  
A study of third-graders enrolled in the physical education departments at welfare colleges

Shohei Kurita, Yusuke Yano, Koji Yamamoto, Tadahiko Nakayama

This study aimed to examine the ideal image of sports coaches, its background, and the possibility changes in it. The subjects of this study were 59 third-grade students enrolled in the physical education departments at welfare colleges. An open-ended questionnaire was used for data collection. Data were collected twice—April 24, 2017 and July 10, 2017—and KJ method was used for data analysis.

The findings of this study can be summarized as follows:

1. In the ideal image of sports coaches, three significant categories that emerged from the data were “value orientation for coaching,” “coaching skills,” and “coach’s personality.”
2. A subcategory review indicated that the subjects thought an interactive relationship between coaches and athletes would be ideal.
3. The background of the ideal image of sports coaches came from the following two main sources that emerged from the data— “my own idea” and “the experience of being coached.”
4. It was suggested that it was easy to change the ideal image of sports coaches during coach education program.

**Key words** : sport coaches, belief, KJ method  
スポーツ指導者, 信念, KJ法

## 1. はじめに

スポーツ活動や健康づくりを意図した諸運動は、生涯を通じて豊かな生活を営むために必要不可欠なものである。中でも一般市民が運動やスポーツ活動を行う上で、スポーツ指導者の存在は大きな意味を持つ。

1972年「体育・スポーツの普及振興に関する基本的方策について」の答申において、

公的指導者資格の整備が唱えられ<sup>1)</sup>、それは1986年に形をみることになった<sup>2)3)</sup>。そこでは、スポーツ指導者の資格制度の改善、スポーツ指導者資格取得者の役割・機能の明確化、スポーツ指導者不足の解決や処遇の改善等が図られることが期待された。さらに、スポーツ指導者の資格制度の整備と同時に、スポーツ指導者の資質向上の重要性が増していった。この例として、文部科学省が中心と

なってスポーツ組織関連団体のコンソーシアムを立ち上げ、正しいコーチングの実現に向けた「グッドコーチに向けた7つの提言」が公表されたことが挙げられる<sup>4)</sup>。

スポーツ指導者の資質向上に関する我が国のスポーツ・体育系大学の役割は大きく、「コーチ学」「コーチング学」「スポーツ指導論」「スポーツ指導者論」といった名称のもと専門教育として授業が配当されているのもそのためである。しかし、池川<sup>5)</sup>によれば、先に挙げた大学で扱われるスポーツ指導者の資質向上を意図して行われる授業は、統一した形で体系的に教えられるという形式ではなく、担当教師の専門家的裁量で授業が実施されているという。そこでの問題点として、専門家の力量次第では、良質なスポーツ指導者養成が困難になってしまうことが挙げられる。その状況を改善するために、スポーツ指導者の学問領域を体系的に構築し、質の高い養成カリキュラムを体育・スポーツ系大学で実現していくことが必要である。では、研究分野では、質の高いスポーツ指導者養成のためにどのようなことができるだろうか。

スポーツ指導者の1つである体育教師の研究では、「学び続ける教師」との立場から、指導者自身が教職生活全体を通じた過程の中で、力量を形成し、向上させていくことが求められている<sup>6)</sup>。これはスポーツ指導者全体においても同様である<sup>4)</sup>。そして、学び続ける教師観において、先行研究では教師が持つ授業観や教師観、子ども観といった指導の根底にある信念が、教師の成長発達に影響を与えることが指摘されている<sup>7)</sup>。その意味で、体育教師を含めたスポーツ指導者の保持する信念は重要であるといえる。中でも、理想のスポーツ指導者とはどのような人物かといった、その者が保持するスポーツ指導者に対する価値観（以下、スポーツ指導者観）は、目

指すべき指導者としての在り方やその後の様々な経験から得られる学習成果を大きく規定することが想定される。では、将来のスポーツ指導を担うスポーツ・体育系の学生はどのようなスポーツ指導者観をどのようなことを背景として保持するのだろうか。また、指導者が持つ信念のレベルでの変容は、一般的には困難であると考えられている<sup>8)</sup>が、指導経験の浅い養成段階の学生ではどうであろうか。これらの問いに対して、情報を蓄積することは今後のスポーツ指導者養成にとって意義があると考えられる。

よって、本研究では、大学生が保持するスポーツ指導者観の実態及びその形成背景とその変容可能性について明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2-1 対象

対象者は、2017年度福祉系大学体育系学科3年生59名である。当該学生は、スポーツコーチング論の受講生であり、授業中に本研究のデータ収集を行った。

本調査を行った福祉系大学では、「中学校及び高等学校教諭一種免許状（保健体育）」や日本体育協会公認の「ジュニアスポーツ指導員」等の資格を取得することが可能であり、対象者の受講していたスポーツコーチング論の授業はそれらの資格取得に関連した授業であった。よって、本研究の対象者の属性として、大多数の対象者がスポーツ指導者を志望している状況であるといえる。

### 2-2 データの収集方法

データの収集は、2回に分けて行われた。1回目は、2017年4月24日、2回目は、2017年7月10日に行った。1回目は対象者が受講

していたスポーツコーチング論の2回目の授業であり、2回目は15回目の最後の授業であった。

収集に際しては、山崎<sup>9)</sup>、嘉数ら<sup>10)</sup>や住本<sup>11)</sup>を参考にした自由記述式の質問紙を作成し、対象者に回答させた。質問項目は、①「あなたが理想とするスポーツ指導者は、どのような人ですか。」②「①でそのように書いた理由は何ですか。」③「①で書いたスポーツ指導者について比喩を用いて表現した場合、どのように表現できますか。」④「③の比喩の理由を書いて下さい。」であった。

### 2-3 データの分析方法

収集された文書データに対して、KJ法<sup>12)</sup>を用いて分析した。

KJ法は、調査者の考えの枠組みに従って、帰納的に概念を生成し、概念の連なりなどから対象者全体の考えの総体を表したり、仮説を生成したりする分析方法である。具体的には、まず、対象者の自由記述の文書を共通した特定の事象でまとめ、他の事象との差別化を図りながら分類していく。次にその分類に適した名称を与えて概念を生成していき、共通した事象をもった概念をより高次の分類(カテゴリ及びサブカテゴリ)として名称を与えまとめていく。このような分析作業を繰り返し行い、収集されたデータの全体像を描いていく。基本的な分類の対象は質問項目①及び②とし、質問項目③と④はスポーツ指導者観の解釈の補足資料として用いた。また、分析は調査者1名で行い、作成されたカテゴリ群に対して研究者2名から意見をもらい適宜修正を図った。

本研究では、データ分析の精度と再現性を高めるために、質的データ分析ソフト Nvivo ver. 10を用いた。

また、本研究の目的を明らかにするために、

次の観点について検討を行った。

- 1) 1回目の調査結果より、大学生の保持するスポーツ指導者観並びにその形成背景を検討する。
- 2) 1回目と2回目のスポーツ指導者観の比較からスポーツ指導者観の変容可能性を検討する。

なお、記述数が1つのみという小規模の概念も存在したが、それらの記述は指導者像の全体を示し得るデータではないと判断し、本調査の結果には示さなかった。

## 3. 結果と考察

### 3-1 大学生の保持するスポーツ指導者観とその形成背景

表1は、本研究の対象者が保持するスポーツ指導者の指導者観を示している。表中のカテゴリ及びサブカテゴリの欄に示されている括弧内の数字は、記述数を表している。また、表中の割合とは全体の記述数に対する各カテゴリの記述数の占める割合のことである。表1に示された大学生が保持するスポーツ指導者観のカテゴリとして、「指導に対する価値観」、「指導技術」、「指導者の人格」、「指導者の競技能力」、「指導に関する知識」が抽出された。また、サブカテゴリとして、「指導に対する価値観」に2つ、「指導技術」には5つ、「指導者の人格」には6つが抽出された。大きなカテゴリとして、指導者として楽しさや人格の形成を保障すべきという考えである「指導に対する価値観」、また、運動技術やチームパフォーマンスを保障すべきという考え方を中核に、その方法を実現する能力に関わった記述である「指導技術」、また、指導者の指導技術とは直接的に関係がある事柄ではないが、指導者のパーソナリティや人格、態度といった記述である

表1 スポーツ指導者観のカテゴリーとサブカテゴリー（1回目）

カテゴリー	割合	サブカテゴリー	計
指導に対する価値観 (31)	24%	人格の形成を重視 (12)	・スポーツ技能だけでなく、人として成長させてくれる人。
		楽しさを重視 (19)	・スポーツの楽しさを重視する指導者。
指導技術 (44)	34.1%	考えさせる指導 (10)	・指導者自身の考えを押し付けるのではなく、対象者自身に考えさせる人。
		対象に合った指導 (9)	・対象者に合わせた適切な指導ができる。
		雰囲気づくり (8)	・集中した環境を造り選手がやりやすい場所（環境）をつくれる。
		競技力向上 (13)	・選手の能力を最大限まで引き出してあげられるような指導者。
		適切な怒り方 (4)	・内容が伝わる怒り方をする人。
指導者の人格 (43)	33.3%	対象者を理解しようとする (17)	・それぞれの人の事を良く知り、性格や技能を分かろうとする人。
		コミュニケーション能力 (8)	・選手、生徒としっかりコミュニケーションがとれ
		公平な指導 (5)	・男女、または人によって、好き嫌いなどの差別やひいきのない指導者。
		対象との信頼関係を築く (10)	・信頼関係を築ける人。
		責任感 (3)	・責任感が強く、有言実行できる人。
		メリハリがある (5)	・オンとオフの切り替えができる人。
指導者の競技能力 (6)	4.7%		・スポーツ全般を人並み以上に出来る。
指導に関する知識 (5)	3.9%		・競技に関する専門的な知識。
計 129			

「指導者の人格」の3つが挙げられる。割合をみると、順に24%、34.1%、33.3%と「指導に対する価値観」のカテゴリーがやや少なく見えるものの、3つのカテゴリーで全体の9割以上を担っていることが示されている。また、全体的な回答の特徴として、記述数の多いサブカテゴリーをみていくと、「考えさせる指導」「楽しさを重視する」「信頼関係を構築する」「対象者を理解しようとする」といった、スポーツ指導者主体の直接的な一方向的な考え方を持った指導者ではなく、スポーツ指導を対象者と共に作り上げていくような

双方向的な営みができる指導者に重きを置いていることが示されている。ただし、叱り方に関する記述やメリハリ、責任感といった対象者の上に立つ指導者の立場をイメージさせる記述も存在する。次に、対象者がどのような背景を根拠にこれらの指導者観を形成したのかをみていきたい。

表2は、対象者が示したスポーツ指導者像の形成背景を示したものである。結果として、2つのスポーツ指導者像の形成背景を示したカテゴリーが生成された。1つは、対象者が指導者の在り方を考えた際に、一定の論理の

表2 スポーツ指導者像の形成背景（1回目）

カテゴリー	割合	サブカテゴリー	計
自身の考えから (38)	56.7%	指導にとって有益 (28)	・人に指導する中で手本を見せたりして指導しなければいけないので人並み程度は運動ができた方がよい。
		対象者にとって必要 (10)	・人間性を向上できることは、社会に出たときに役立つから。
自身の教えられた 経験から (29)	43.3%	模範とする (16)	・私が教師になると決めた理由の1つに恩師の影響があり、その恩師が問1で書いたようなことの人だから。
		反面教師とする (13)	・差別やひいきをする指導者とそうでない指導者が実際にいてあんな人にはなりたくないと思っただから。
計 67			

もと、それが適切であると対象者自身の考えで判断した「自身の考えから」と、もう1つは、対象者がこれまで出会った指導者に対して抱いた印象から形成された「自身の教えられた経験から」である。また、「自身の考えから」は、「指導にとって有益」と「対象者にとって必要」の2つのサブカテゴリーから、「自身の教えられた経験から」は「模範とする」と「反面教師とする」の2つのサブカテゴリーから構成されている。サブカテゴリーの「指導にとって有益」とは、指導を行う論理から考えて、それが効率的であるとか、パフォーマンスをより向上させる、チームパフォーマンスを上げるといった視点から記述されたものによって構成されている。対して、「対象者にとって必要」のサブカテゴリーでは、指導を受ける指導対象者の立場から考えて、人格形成などの長期的な視点に立った場合に必要であるといった記述から構成されている。これらの対象者の考えが構築された背景には、対象者が1、2年次の間に受けた「スポーツ指導者論」や「トレーニング論」等の授業の影響もあると考えられる。

また、「自身の教えられた経験から」のサブカテゴリーの1つである「模範とする」は、自

身の教えられた経験を肯定的に解釈し、それを再現することが良い指導者であるといった考え方に基づいた背景であり、逆に「反面教師とする」とは、自身の教えられた経験を否定的に解釈し、それを回避する指導をする指導者が良いという考え方に基づいた背景を示している。

### 3-2 大学生のスポーツ指導者観の変容可能性

表3は、2回目に行ったスポーツ指導者観の調査結果を示したものである。1回目の結果と類似していることは、サブカテゴリーの「考えさせる指導」「対象に合った指導」「対象者を理解しようとする」「対象との信頼関係を築く」「対象の利益を考える」など、指導対象者の存在を意識して、指導者と対象者との双方向的な関係性を意識した記述が多いことである。逆に、大きく異なる点として、「指導に対する価値観」のカテゴリーの記述が減少し、「指導者の人格」や「指導に関する知識」といったカテゴリーの記述が増加していることが挙げられる。研究対象者は、1回目と2回目の調査の間に、「スポーツコーチング論」や「健康運動指導法Ⅱ」などのスポーツ指導に関わった授業を受講していた。



表3 スポーツ指導者観のカテゴリーとサブカテゴリー（2回目）

カテゴリー	割合	サブカテゴリー	計
指導に対する価値観 (9)	6.4%	人格の形成を重視 (8)	・試合に勝つことも重要だが、人間性や社会人として教えられる指導者。
		楽しさを重視 (1)	・スポーツをするのが好きになれる様な指導ができる人。
指導技術 (39)	27.9%	考えさせる指導 (9)	・指導者のみで決めず、選手主体で考えさせる指導者。
		対象に合った指導 (11)	・人（選手）にどの効果的な運動を指示するのか、深く考えている。
		雰囲気づくり (10)	・練習の雰囲気は、指導者と選手間で意見や質問がしやすい環境を作ることができる。
		競技力向上 (6)	・選手を上達させる指導者。
		適切な怒り方 (3)	・ちゃんと叱ることのできる指導者。
指導者の人格 (75)	53.6%	対象者を理解しようとする (15)	・生徒の意見もしっかりと聞き入れる心のある人。
		コミュニケーション能力 (8)	・選手、生徒とコミュニケーションがとれる。
		公平な指導 (10)	・生徒たちに平等に接することのできる人。
		対象との信頼関係を築く (17)	・選手が困った時にすぐにアドバイスを選手自身から聞きに行ける指導者。
		対象者の利益を考える (6)	・すべては生徒のために動く人。
		正しい振る舞い (13)	・生徒が目標にできる人格を持った人。
		メリハリがある (6)	・オンとオフの切り替えができる人。
指導に関する(知識) (17)	12.1%		・選手に教えられるだけの専門的で広い知識を持つ人。
計 140			

それらの授業では、スポーツ指導に関する知識を学習したり、模擬的ではあるがトレーニング指導の経験を蓄積したりしていた。嘉数ら<sup>13)</sup>は、指導経験を経ることによって、授業観が具体的なものへと変化していく過程の存在を指摘していた。この指摘を本研究に引き寄せて考えるならば、指導に対する価値観といった抽象的な次元から、それを実現する指導者としての態度や在り方といったやや具体的な次元に、対象者のスポーツ指導者像が移行したことが推察される。また、「指導者の人格」の記述が増加した要因としては、対

象者が受講した「スポーツコーチング論」の授業において、スポーツコーチの人格や指導の在り方が指導を受ける者の今後の人生や物事の見え方に重大な影響を与えることについて事例を取り上げながら詳細に取り扱ったことが影響している可能性が考えられる。加えて、「指導に関する知識」の記述が多くなった背景についても、同じように対象者が受講した授業の影響が考えられる。いずれにしても、秋田<sup>8)</sup>は、信念レベルでの変容は困難であることを指摘しているが、まだ指導経験の浅いスポーツ指導者の養成段階の大学生の

表4 スポーツ指導者観の形成背景（2回目）

カテゴリー	割合	サブカテゴリー	計
自身の考えから (47)	73.4%	指導にとって有益 (19)	・ちゃんとした知識のないひとに教えられても効率が悪く、目的に合っているかもわからないから。
		対象者にとって必要 (28)	・選手たちの考える力や、話し合う力をつけ、主体性を身に付けさせることも大切だから。
自身の教えられた経験から (17)	26.6%	模範とする (11)	・今までの部活の顧問がそうであったのと、私自身がそういう人がいたらいいなと思ったから。
		反面教師とする (6)	・今まで指導してもらった先生の中にいて嫌だなと思ったから。
計 64			

場合には、スポーツ指導者観などの信念が、比較的容易に移り変わる可能性があることを本研究の結果から示すことができる。

表4は、スポーツ指導者観の形成背景の2回目の調査である。1回目と比較すると、「自身の教えられた経験から」のカテゴリーの記述数が減少し、「自身の考えから」のカテゴリーの記述数が増加している。この変化は、研究対象者の経験上、良かったり悪かったりした指導者を単に再現したり修正したりするのが良いというわけではなく、なぜその指導者が良いのかという論理を根拠として持つようになったことを表していると考えられる。また、サブカテゴリー「対象者にとって必要」の記述数の増加がみられる。このことは、指導を効率的に行うといった短期的な指導の円滑化のみではなく、長期的にみた対象者の成長に重点を置くことの重要性の気づきが生まれてきたことが推察される。これらの結果からも、スポーツ指導者の養成段階である大学生は、授業などの学習や模擬的な指導経験からでも、自身のスポーツ指導者観を変容させ得ることが示されているといえる。

#### 4. 結論と今後の課題

本研究では、福祉系大学体育系学科の大学生が保持するスポーツ指導者観とその形成背景及び変容可能性を明らかにすることを目的とした。その結果は以下の通りである。

まず、スポーツ指導者観として、大きく3つの考えが抽出された。それは、「指導に対する価値観」、「指導技術」、「指導者の人格」である。つまり、これらの要素を備えた指導者が良い指導者であると本研究の対象者が考えていることになる。また、サブカテゴリーの検討からは、指導者と指導対象者が共に指導を創り上げていくような双方向的な指導の在り方を重要視している傾向がみられた。この点は、本研究の特徴的な点として示すことができる。

次に、スポーツ指導者観の形成背景については、大きく2つみられた。1つは、研究対象者自身の考えを根拠としたものであり、もう1つは、研究の対象者がこれまで出会ってきたスポーツ指導者を起点として考えるものであった。

最後に、スポーツ指導者観の変容可能性については、1回目と2回目の調査票の記述傾向の変化から、これまでの指摘<sup>8)</sup>とは異なり、養成段階においては短期間でも変容がみられ

たことが示唆された。また、その変容に関しては、直近に行われたスポーツ指導に関する授業の影響があったことが推測された。このことは、スポーツ指導者の養成段階である大学生の時期に経験する授業や指導経験が、スポーツ指導者としての初期の信念の形成に影響を及ぼす可能性を推測させる。また、それは、我が国で唱えられているスポーツ指導者の資質向上にとって、大学で行われるスポーツ指導に関連する授業や実習等の重要性を改めて示唆するものといえる。

本研究で得られた知見は、あくまで本研究の研究対象者に限定していえることであり、これをより精度の高い一般論として捉えるためには、様々な対象に対して、類似した手続きで研究を進めていった上で検討していく必要がある。また、本研究は対象者の極めて短期間の変化を追ったものである。スポーツ指導者の長いキャリアの中でその信念がどのような過程を経て形成、変容をするのか、今後より詳細な検討が必要だろう。それらを今後の課題としたい。

## 引用・参考文献

- 1) 文部科学省：体育・スポーツの普及振興に関する基本的方策について（答申）昭和47年12月20日。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_hoken\\_index/toushin/1314680.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_hoken_index/toushin/1314680.htm), (参照日2017年9月30日)
- 2) 文部科学省：社会体育指導者の資格付与制度について（建議）昭和61年12月10日。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_hoken\\_index/toushin/1314684.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_hoken_index/toushin/1314684.htm), (参照日2017年9月30日)
- 3) 文部科学省：スポーツプログラマーの養成について（建議）昭和62年12月16日。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_hoken\\_index/toushin/1314685.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_hoken_index/toushin/1314685.htm), (参照日2017年8月30日)
- 4) 文部科学省：新しい時代にふさわしいコーチングの確立に向けてグッドコーチに向けた「7つの提言」平成27年3月13日。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/27/03/1355873.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/03/1355873.htm), (参照日2017年8月30日)
- 5) 池川哲史：スポーツ指導者の教育的マネジメントに関する一考察。京都学園大学総合研究所所報, 17, 10-20, 2016.
- 6) 文部科学省：教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（中央教育審議会答申）平成24年8月28日。  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/miryoku/1326877.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/1326877.htm), (参照日2017年8月30日)
- 7) 木原俊行：授業研究と教師の成長。日本文教出版：東京, 2004.
- 8) 秋田喜代美：教師の信念。日本教育工学会編, 教育工学辞典。実教出版：東京, pp. 194-197, 2000.
- 9) 山崎敬人：理科教師の専門的力量に及ぼす学校組織特性および教育信念の影響。教育実践研究指導センター研究紀要, 4, 33-44, 2007.
- 10) 嘉数健吾・岩田昌太郎：教員養成段階における体育授業観の変容に関する研究。日本スポーツ教育学会第30回国際大会記念論集, 139-145, 2010.
- 11) 住本純：小学校教員養成段階における体育授業観の様態—短期大学児童教育学科を事例に—。夙川学院短期大学紀要, 43, 18-26.
- 12) 川喜多二郎：発想法。中央公論新社：東京, 1967.
- 13) 嘉数健吾・岩田昌太郎：教員養成段階における体育授業観の変容に関する研究—教育実習前後に着目して—。体育科教育学研究, 29 (1), 35-47, 2010.